

対話における「我々経験」の現象学

—対話の構成論的科学に向かって—

橘 英希 (Eiki Tachibana)

大阪大学

本発表は、「対話とは何か」という問題に対して現象学的にアプローチしつつ、とりわけ対話の「我々経験 (we-experience)」という現象ないし経験の構造を明らかにすることを目的とする。以下では、まず、本発表の問題意識の背景を説明する。

現在、人間と人工物との「対話」が、大規模言語モデル (LLM) 技術の急速な進展を背景にしてますます我々の日常生活のなかで普及してきている。ChatGPT や Claude3 に代表される LLM に接すると、人間以上に「よく喋り、よく意味を理解する」という印象をもつ。これらの LLM がもつ言語操作や概念操作の諸能力は、一般にそれらについて高い能力をもっているとされる哲学者をも凌駕しつつある、ないしすでに凌駕したとすら思わせるところがある。(これは単なる印象論であり、これらの能力について客観的に測定する方法論が確立されるまでは、確かなことは言えないにせよ。) しかし、その一方で、まだ LLM とともに十全な対話をなすことができない、との直感がある。この直感が正しければ、対話の能力は、単に言語や概念を操作する能力には還元することができないということになる。LLM という「よく喋りよく理解する」人工物が出現したことをきっかけに、むしろ「対話とはそもそも何だったのか」という問題意識が生まれるわけである。「対話」と呼ばれる実践が LLM の登場によって人々の注目の的となった今、対話の実践を構成する諸原理 (の一端) を明らかにしたいということ、これが本発表の動機づけである。

対話とは何か、という問題に対するアプローチとしてさしあたって考えられるのは、科学的なアプローチと哲学的なアプローチであろう。前者については、しかし、種々の認知科学系のジャーナルを紐解いてみても、対話に関する経験的な知見は散発的に確認されるのみである。経験的探求を体系的に駆動するパラダイムとなるような対話観が、まだ科学の現場では確立していないというのが現状であるようだ。そこで、本発表では、未来の「対話の科学」の確立に向けて、まずは哲学的なアプローチのもと、対話という複雑で複合的な事象に対して概念的な整理を与えることを目指したい。とりわけ、本発表では現象学的なアプローチを採用する。ここで、現象学的に物事を明らかにするということの意味しているのは、その物事がある主体へと一人称的に現れるその経験の有り様を明らかにする、ということである (植村他, 2017)。つまり、対話へと現象学にアプローチするということは、対話がいかなる経験である (what it is to be in dialogue) のか、これを同定することである。本発表は、現象学者であるダン・ザハヴィらによって最近精力的に展開されている「我々経験」の現象学 (Zahavi, 2015, 2023; Leon et al., 2019)、及び、日本の思想家である上田閑照の対話論 (上田, 1999) を

ベースにして、対話経験の諸相を明らかにする。(上田の対話論は、ザハヴィの議論を「対話とは何か」という問題が与える文脈において補完するに際して、有益な観点を提供してくれる。) 本発表によれば、対話とは、「我々経験 (I-experience)」、「汝々経験 (you-experience)」、「我々経験」、「世界経験 (world-experience)」という四種の経験の複合体である、ということになる。

以上のような概念的な整理に加えて、本発表では、未来の「対話の科学」に向けて、そのありうる姿をスケッチすることを行う。対話の科学とは一体いかなるタイプの科学であるだろうか。それを構想するにあたって、本発表が参照したいのは、行為主体性感覚 (sense of agency) の認知科学・心理学である。その領域では、近年、単独行為における主体性感覚から共同行為における主体性感覚 (sense of joint agency ないし sense of togetherness と呼ばれる) へと注目が移ってきており、対話の「我々経験」を解明するための立脚点となることが期待される。本発表では、これら現行の「我々経験の科学」が則る一つのパラダイムを「予測可能性パラダイム」として抽出し、批判的に検討する。その結果、それが、本発表が現象学的アプローチのもとで描いた「対話における我々経験」を明らかにしようとするには不十分であり、別のパラダイムが必要であることを議論する。

最後に、この別のパラダイムのもとで遂行される未来の「対話の科学」の一つの展開の仕方として、構成論的アプローチを描写する。科学における構成論的アプローチとは、平たく言えば、ターゲット現象を作ることによって分かろうとすることである。対話の構成論的アプローチにおいては、人間と対話ができる人工物を作ることによって、対話の姿を明らかにしようとする。本発表では、構成論的アプローチが取りうるプロセスを二つの段階に分けて整理しつつ、未来の「対話の科学」に対してガイドラインを提案したい。

文献

Felipe Leon, Thomas Szanto, Dan Zahavi (2019), Emotional Sharing and the Extended Mind, *Synthese*, 196, pp. 4847–4867

上田閑照『実存と虚存：二重世界内存在』筑摩書房、ちくま学芸文庫、1999年
植村玄輝、八重樫徹、吉川孝（編著）、富山豊、森功次（著）『現代現象学：経験から始める哲学入門』新曜社、2017年

Dan Zahavi (2015), You, Me, and We: The Sharing of Emotional Experiences, *Journal of Consciousness Studies*, 22(1–2), pp. 84–101

Dan Zahavi (2023), Observation, Interaction, Communication: The Role of the Second Person, *Aristotelian Society Supplementary Volume*, 97, pp. 82–103